

一般の部

入賞

広島県知事賞

一握りの砂

庄原市 奥井 久子

「本川小学校の砂場の砂」
父がぼそつと言う

藍染めの日本手拭の上に

一握りの砂があつた

祖父母と父と母とわたし

仏間のテーブルの上の砂を囲んで座っている

祖母の呻くような泣き声を

ひぐらしの激しい鳴き声が消していた

「さわってあげて おばちゃんの骨」
母が言った

おそろおそろ指で触れる

乾いてカサカサと碎けていく砂

白くてはかない粒

なぜだか急に怖くなった

指についた砂を 左手ではたいてしまった

キスター洋裁店

爆心地近くにあった叔母の店

かわいいフレアスカート・ブラウス

虹色のセロファンに包まれた飴菓子

おばちゃんは帰る度に

ヒロシマの街のあこがれをくれた

父は燃えさかるヒロシマに入り

何日も叔母を探し続けた

やつのことで

本川小学校の砂場で焼かれたという情報

青い炎をあげて燃える死体の山

その砂場の端っこの砂を

父は持ち帰ってきたのだという

次の日の朝

おそるおそる仏間の戸を開けた

油紙と白い半紙が敷かれ　その上に
こんもりと砂は盛られていた

息をのんだ

朝の日射しの中で砂が光っていたのだ

昨夜見た砂ではなかった

白・黒・黄金・琥珀……

砂の一粒一粒が屈折率を持ち

乱反射し合っている

荘厳な砂の輝き

何百・何千の命が光っているように見えた

思わず手を合わせたわたし

あれから七十七年

わたしも年を重ねて　全てを忘れていく

でも　八月六日が来るたびに

あの輝く砂の光景は鮮やかに蘇る

叔母の墓の下に　あの砂が眠っている

それを知っているのは　わたしだけになった

父は第二次放射能でまもなく逝った

三十九才だった

叔母の墓と父の墓は
並んでいる

広島県議会議長賞

小さな本立ての中で

世羅郡世羅町 高本 澄江

部屋の隅の小さな本立ての中で

その本はいつも私を待っていてくれるのです

—どうした　どの花の声が聞きたいのだ—

何が悲しいのか寂しいのか

何に怒っているのか憎んでいるのか

心が揺らぎ頭がかった時

部屋の隅の小さな本立ての中で

その本はいつも私を待っていてくれるのです

星野富弘さんの詩画集達が

—前略—

しゃべりたくもない

野に咲く花のように

静かに一人でいたい

しかし腹がへった

残念だが

腹がへってしまった ―野に咲く花のように―より
思わず笑ってしまったよ 星野さん
水色のいぬのふぐりが黙って咲いていますね
あなたの腹がへってしまった時

私だって
誰にも会いたくない
しゃべりたくもない時があります
野に咲く花のようにね

私の山畑でも 野に咲く花は
時に 私を励まし心安らかにしてくれます
でも、でもです
野に咲く花は
たちまち雑草となり荒草となります
そして私を打ちのめすのです

ほら見て下さい
この清らかで儂げな露草だつて
地を這い土を掴み伸び上がり
びっくりするほど逞しい茎を延ばし
縦横に蔓延るのです
それは雑草なんです 荒草になるのです

この月見草だって
こんなに堅くて太い茎になるのです
鎌では刈れません
草刈り機の馬力を全開にして
防護目鏡を掛けて刈っていくのです
私は農婦なのですから

種子を播き育てたコスモスだって
鶏頭だって百日草、ひまわりだって
抜き取り刈り捨て焼くのです
秋の畑にするために

大根 白菜 広島菜 人参 蕪も播くのです
そして そして 腹がへるのです
残念ですが 野に咲く花にはなれません
私は農婦ですから

さあ また あの小さな本立てに帰り
静かに私を待っていて下さい
私が寂しい詩人に返る 冬の日まで

現 代 詩 部 門

広島県教育委員会賞

開花支度

初めてのバイト先で怒られた
本当の責任の質量を知った瞬間だった

僕はずっと大人の皮を被った子供だった
見かけや周りの評価から

よくできた子だと

しつかりした子だと

責任感のある子だと

よく言われてきた

だから気づけなかった

いつの間にか周りは

綺麗な社会人のローブを羽織った

大人になっていたことに

僕の皮は向かい風に煽られて
破れ

剥がれ

廿日市市 野田友里恵

飛ばされ

僕の幼い本質をさらけ出した

大きな世界を身勝手なフィルターにかけて

何の制限もない世界だと勘違いして

早くあの自由な世界に羽ばたきたいと

願っていた

願っていたのに

身勝手な幻想の世界など存在しないと

分かるはずだった

分かっていたはずだった

僕はあつという間に音を上げた

向かい風の世界から足を引つ込めた

抗うための力量は備わっているはずなのに

つい数ヶ月前だけど

うようやく成人になれたのに

どうもその向かい風に耐えられなくて

もう守られた世界にいられるのは

あと僅かしかないのに

嫌でも無条件に守られた世界から

出ていかないといけないのに

一面の花畑に隠された
無数の罨

僕らはそんな人生の中を歩いていく
いつか

いつかこんな僕でも

摘み取った花を片手に

足元の罨を避けながら

あの夕日は今日も綺麗だね、と

眩ける人生が描けますように

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

波止の人影

三原市 末国 正志

ある著名な画家の「瀬戸内」と題された油彩画はこの画家の絶筆であるが

画像のみ残り実物は所在が知れない

ところが同じく「瀬戸内」の題を持つ

やや小ぶりな下絵したえは残っており

東京の瀟洒しょうしゃな美術館に収おさまっている

下絵と本画のただ一点の違いは

波止はとの先端にぼつりと佇む小さな人影

本画の方だけにそれがある

絵にこもる思いがそこから

淡い泉のように湧出湧しゅつし続ける

きつとその人影は波止先に佇んだ自身の姿…

本画「瀬戸内」の絵の具の乾くのも待たず

画家は急逝した

色彩の豊かさで知られた画家の

明治大正昭和にわたる画業は
人影を描いた一筆の泳ぎでもって閉じられた

その二枚の絵「瀬戸内」は
私の故郷の風景である

天の意は画家の最後の題材に
私の故郷の美しい眺めを与えたのだ

だから波止先にぼつりと佇む人影は
画家が私の故郷を訪れた遠い日の

私が生まれる以前の遠い日の
この町生まれの娘である若い日の母にも

あるいは苦しい時代の壮年の祖母にも見えてくる
いや 絵の中に留められた時を超えて

私がそこに立っているとさえ感じる

波止先に人影が見えない日はない

画家の最後の筆先の呼吸の中に

日々の人影は

海に向かい佇んでいる

広島市長賞

金色の折鶴のうた

ゆりかごを求めて

鳥は飛翔し

人々はうたを紡いでゆく

ある春の日に

原爆の子の像はスズメの家となり

鐘はスズメのゆりかごとなった

人々は鐘の鎖をそつとはずして

選択を信じ

うたを紡いだ

鐘はかすかに揺れて

金色の折鶴も一緒にうたった

すべてのいのちは抱かれて

生まれ育ってゆく

広島市
松尾
如華

スズメの子らは

金色の折鶴に小さな羽をやすめて
風と鐘と折鶴と一緒にうたった

ゆりかごのうたを抱いている

この世界を

折鶴は守りつづけて

静かな春に

原爆の子の像はいのちの家となり

鐘はいのちのゆりかごとなった

巣立ちを終えたゆりかごには

孵ることのなかったうたが

静かに眠り続けており

人々の手に抱かれて

大地のゆりかごへと還っていった

人々は鐘の鎖をそつともどして

鐘を鳴らし

風と鐘と折鶴と一緒にうたった

鳥はうたい

人々はうたい

うたは世界へと飛翔する

あの日を記憶する少女は

沈黙のまま

人々の選択を信じて

金色の折鶴を空に捧げている

広島市議会議長賞

雨恋い

傘を差すと雨が降る
傘のなかに雨が降る
震えるように冷めたその隙間に
いつかのあなたを見るために

どうしようもないような僕の人生に
たったひとつ色づいたあなただけ
どうか忘れないように、今日も泣こう

花が落ちるその様に
泣きたいほどに焦がれた
ただだからと延ばした寿命が
今もひたすらに疎ましい

どうしようもないような僕の人生を
そつと優しく掬ったあなただけ
どうかこぼさないように、夜を待とう

広島市 佐々木あお

いつか傘のなかに降った雨が
沈むような水溜まりをつくって
溺れていくその息苦しさは
きつと胸に優しいから
だから、僕は傘を開いて雨を待つ
あなたを、待っている

傘を差すと雨が降る
傘のなかに雨が降る
あなたの居ない褪せたこの世界で
いつかのあなたに会うために

広島市教育委員会賞

私から私へ向けて

三次市 藤谷 静香

私は私の性格をほとほと持て余しており、三つ子の魂と申しましょうか物心ついた頃にはすでに私の腹の中に住んでおりました。この子のおかげで私はずいぶん不自由な思いをしてきました。弱いくせに自尊心が強くわがままなのです。利かん気でおよそ人好きのしない子なのです。何度も追い出そうとするのですが根を張ったように動こうとしません。理を尽して言い聞かせるのですが情けないくらいに聞き分けがないのです。

この子には世間にそぐわない所があります。私はこの子のことを世間に気付かれるのではないかといつも戦戦恐恐としておるような次第なのです。

私はこの子を克服してこの子から自由になりたいのです。

困ったものですね。

ありがとうございます。分かっていただけますか。

いえいえ困ったのはあなたの方ですよ。克服されるべきわがままは見えても、克服しようとする側のわがままはなかなか見えにくいものなのです。あなたはあなたの思うがままにその子を変えようとしてはいませんか。

向上心や信念や理想という言葉をやみに使つてはいけません。傲慢な自尊心を隠し持っていることがしばしばあるからです。現実を強引に支配し操ろうとしがちだからです。

あなたはあなたの作品ではありません。あなたはあなたに即して生活していかなければなりません。自尊心とともに小高い丘からあなたを見下ろす理想はみじめなあなたと一緒に歩きたがりません。ほんとうにあなたを導く言葉は、時には強く命令しながらあなたとともに歩く言葉です。まず一歩です。蟻の一歩です。蟻の一歩でいいというのではなく、蟻の一歩こそ一歩なのです。根拠に支え

られた一步はありません。論理は後から付いて来る性質のものなのです。

その子がどんな子であらうと、あなたはその子を見放してはなりません。拒んではいけません。あなたに許されなければその子はいつまでたつてもあなたにとって厄介者であり続けるでしょう。あなたに見捨てられたその子はおどおどしながらどんなに悲しい思いで世間をさまようことでしょう。あなたがその子をそのまま今許さなければあなたの居場所はどこにもありません。

支配することによって得られる自由は空虚なものです。許すことによって生まれる自由は生きています。人を、自分を、許し愛し、ひがまず怒らず、一日一日を過ごしていきましよう。

現 代 詩 部 門

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

想い

どれだけ傷ついてもいい
私はあなたを守り続けるよ

あなたと出会ったあの日から
何度共に歩んだかな

晴れの日も雨の日も、あなたと一緒にだったから
私は強くなれたと思うんだ

たまにあなたが他の子といるのを見ると
まだまだ嫉妬しちゃうけど

また私と一緒にいることを選ぶあなたから
結局離れられないんだ

ずるい人だな
そんな所も大好きなんだ

広島市 佐々木瑠音

どんなに険しい道のりも

あなたとなら乗り越えてゆけるでしょう

これは私の気持ちを綴った

あなたへの詩

靴の私が伝えられるはずないけど

草を抜く

広島市 大澤 優子

滴^{したた}る汗が草の露となる炎天下
ただ無心に草を抜く

激しい雨に打たれ
根を張り巡^{めぐ}らせた草ぐさは
輝^{つや}く緑の剣^{つるぎ}となり
命燃^もやして天を仰^{あが}ぐ

―美しく匂^{にお}うこの草ぐさが
地球のどこかで今このとき
飢^うえて死にゆく子どもらの
糧^{かて}に姿を変えないだろうか―

大地と交わす言葉は
途方もなく虚しく

雲となりて空に散る

草を抜くしかできぬ私の
せいいっぱいの声の
悲しいほどの小ささよ
何の力も持たずして
草とのみ対峙し続ける

戦^{いくさ}の血に濡れる草
倒れた兵士が最期に見る
ひと握りの夢

それはやがて
果てしない地の底に吸い込まれ
誰の胸にも届くことはない

静かな祈りを込めて
私はひとり
ただ草を抜く

海上

広島市 服本 吞

大きな海が寝そべるこの世界で、
ボクは小さなボートの上で生まれた。

生まれてからのほぼ全てを、

ボクはこの木製の家の中で過ごしてきた。

パパは毎日釣りのお仕事をして、

ママは毎日ボクのお世話をしてくれた。

ママの話によると、世界のどこかにはリクと

いう大きな舟があつて、ヤマという大きな帆

にカワという大きな割れ目がついているそうだ。

ボクにはよく分からなかった。

大人のママにもよく分からないみたいだった。

けれども海のことなんでも知っていた。

ボクよりずっとずっと大きいこと、

沢山のお魚が海の中で生活していること。

どうしてボクらにはヒレやエラがないの。

どうしてボクらだけ海の上で生きているの。

パパがボクの頭をゴシゴシなでる。

きつとパパにも分からないんだろう。
パパの大きな手で前がふさがれて、
パパの表情は見えなかった。

月がたくさん回って

ボクもずいぶんと大きくなった。

最近パパがもう一つ

新しいボートを作ってくれている。

これが完成すれば、

ボクはひとりで生きなきゃいけない。

二人と暮らすには

ボクは大きくなりすぎたみたいだ。

通りすがりのおじいさんが、

おしゃべりな人で色々と話をしてくれた。

きつと一人で退屈なんだろう、ボクもそうだ。

でもおじいさんはバカなことばかり言う。

リクなんて幻だ

ボクらの人生なんてくだらない

そこでボクはおじいさんに別れを告げ、

その幻を探す旅に出た。

この果てしない海の上に浮かぶ、大きな舟。
ボクは今もリクを探して旅を続けている。
この旅でひとつ確信したことは、
やっぱりあの人はウソつきだったこと。
海を渡るごとにボクは新しい体験をした。
その度にボクの胸は高まって、
自分が前よりも大きくなったような気がする。
今まで当たり前だと思ってきたことが、
当たり前じゃないことなんて何度もあった。
今までまったく知らなかったことと、
出会っては思い出が溜まっていく。
だから進め、もっとすすめ、
小さなオンボロボート。
ボクの夢のために。

あこのころのここのろのきろく

安芸郡海田町
竹野内康子

私は十歳、

きつと

初めての恋をした

それは

心の奥に棲みついた

ほのかに温かい

小さな種

「おはよう」

涼しい声は

早春の風に乗って

私を追い抜かず

自転車をこぐ

赤いソックスの

後ろ姿に驚かされた

中学の卒業式の朝

私は十六歳、
古めかしい木造校舎の
廊下や踊り場で
新しい人らの
眩しく、美しい光景に
出会うたび
心はとらわれ、魅せられ、傷ついて
きらめく波間に揺蕩った
幾度も 幾度も

私は二十歳^{はたち}、
ミニスカートで街を歩き
すり鉢状の広い教室で
長い講義を聴いていた
無精髭らが
くわえ煙草で
文学論を戦わせる
雑然とした部屋、
私はひとり
十代の純情を
大学ノートに書き留めていた

三十三歳、

懐かしい顔の集まる

宴の夜

廊下で出くわした

赤いソックスのその人が

初恋は君だったと

告げる瞬間

うずもれていた

小さな種は

戸惑いながら

静かに、昇華した

そして今

六十八の私がつづる

瑞々しく、儚い

あのころのころのきろく

あばれトマト

廿日市市
和崎くみ子

姉がトマトをどっさり持ってきた
できすぎたトマトをもらつたと
皮はかたいよ

店で買うものは商品で
しつかり管理されたもの
家庭菜園はそうはいかない
季節のものが一度に連なり
持て余すほどできたり

不揃いでワンパクなトマトが
袋からころがりてきた
たっぷりと陽と風と土を吸いこんで
育ちすぎたのが すじばったのが
一目でわかる

ハウレンソウばかり

ハクサイ ダイコン ジャガイモばかり
そんなおかずの日もあったな
裏の畑では毎日食べても残る野菜が育ち
家の中では反抗期にむかう子ども達が育ち
賑やかだった

普段着で 手加減なしに
畑で存分にあばれたトマト
すっぱくて 甘い
かたくて じゅくじゅく
夏を遊びきった頃の まま

帰りたいところがあるとしたら
そんな日照りの中
あふれるほどあった元気
予測不能な成長期
そんなトマトの赤い実の中